



TITLE:

# 階層構造の分析：タイ国東北部の稲作農村

AUTHOR(S):

水野, 浩一

---

CITATION:

水野, 浩一. 階層構造の分析：タイ国東北部の稲作農村. 東南アジア研究  
1968, 6(2): 244-260

ISSUE DATE:

1968-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55490>

RIGHT:

## 階 層 構 造 の 分 析

—— タイ国東北部の稲作農村 ——

水 野 浩 一

**An analysis of social stratification**

—— **A rice-growing village in Northeast Thailand** ——

by

Koichi MIZUNO

### は じ め に

この論文の目的は東北タイにおける一農村の社会階層を分析し、その構造的特質を明らかにすることにある。調査村ドーン・デーンゲ部落にかんしては、すでに「東北部タイの稲作農村における農地所有と家族の諸形態」「宗教儀礼の機能的体系」「東北タイ農村の経済生活」と題して本誌に記したことがある。<sup>1)</sup> 本稿はこれに続く予備報告の一部である。

既述の報告・論文には階層に関連した事項が多く含まれている。しかし、階層化の基本的標識が未解決であったために、いつも正面からこの問題を取り扱うことができなかった。通常、農村の階層構造といえば、農地所有規模や自小作別農家構成が分析の出発点となり、また、それが階層化の客観的標識のうち、もっとも重要なものとされる。しかし、いかなる標識を採り、それをいかに組み合わせるかは、村人の意識構造にしたがってなされることが望ましい。また、その標識は、とうぜん、村の社会経済構造の特色を反映したものでなければならない。

「タイ農村の社会的地位の上下は本質的に個人主義的であり、いいかえれば、上下の差は個人的な性格によって決定され、親族集団によって獲得されたり維持される性格によって決定されない」といわれる。<sup>2)</sup> 調査部落においても、構成家族の社会的地位が祖先代々定まることもなく、身分階層として固定されることもない。その意味で、この部落は無家格型の社会である。そして、各農家の社会的地位は、夫もしくは世帯主の個人的能力にもとづく業績に依存するところが多い。その業績内容は各人各様であるかもしれないが、すべての人、あるいはすべての農家に共通して認められるもっとも基本的なものとして、家族再生産に対する貢献度が考えら

1) 本誌第3巻第2号(1965)、第3巻第3号(1965)、第5巻第3号(1967)。

2) Wendell Blanchard (ed.), *Thailand—its people, its society, its culture*. New Haven, 1958. p. 405.

れる。これは観察者が任意に選り出したものではなくて、格づけ作業に表現される階層観念として村人の意識に潜在的に存在しているものである。そして、後述するごとく、貢献度を測定する指標として農地所有規模と家族の周期的発展段階上の形態を採ることが適切である。いままでのタイ村落の集約的調査<sup>3)</sup>では、社会的地位の高い家族の記述や格づけ作業の結果が報告されているけれども、その背後にある評価の基準、およびその基準にもとづく階層構造の分析はおこなわれていない。

このような分析視角から、部落の階層構造を取り上げよう。全体の理解を容易にするために、つぎにまず部落の社会経済構造の特質を概括しておく。

## I 社会経済構造<sup>4)</sup>

調査部落ドーン・デーンゲはコーンケーンの町から南へ約20キロのところにある。チー川にほど近いので、旱魃による被害のみならず、洪水に見舞われることもしばしばである。部落の歴史は比較的新しく、70年くらい前にマハーサーラカームやローイエットから移住してきた人々によって開拓された自然村である。定着後、かれらは部落を危険から守るためプー・ターを小社に祭り、守護霊として崇め、また部落の繁栄を願って寺院を建立した。その後、プー・ターは村の祈禱師が破壊し、それにかわって祈禱柱を部落の中心に建てたので、村人はこれをブ・バーンと称して崇めている。そのそばに集会所があり、竹製の鳴物を合図に、寄合いが開かれる。部落には部落長1名があり、村落行政の末端事務を担当するとともに、部落の自治運営に指導的役割を演じている。

部落の経済は自給自足を濃厚にとどめている。不作の年には米を購入しなければならないとしても、衣食住、家具、農具、漁具の多くは自家製であったり、近くの村から調達される。もっとも、近年、国道や支線の建設にともない、村と町との往来が盛んになり、生産物や消費物資の流通が容易になってきている。しかし、農業の商品化はおくれており、その経営は前近代的粗放農業の域を出ない。経営費はほとんど皆無であるし、労働力を他から雇うこともまずない。稲作が極度に不安定であり、生産性が低いために、農業所得は家計費をまかなえない。そのため、ほとんどの農家はなんらかの副業を営んでいる。したがって、余剰はきわめてわずかであり、赤字農家もかなりある。

部落の戸数は132戸であるが、先生2名、賃金労働者1名、無職1名の世帯を除くと、他の128軒はすべて農業に従事している。村人の所有する農地は全体で2,533ライであって、その

3) 例えばつぎのものがある。Howard Keva Kaufman, *Bangkhuad—A Community Study in Thailand*. New York, 1960. pp. 33~36. Konrad Kingshill, *Kudaeng—A Village Study in Northern Thailand*. Chiang Mai, 1960. pp. 270~272.

4) この節は前掲「農地所有と家族の諸形態」の要点をまとめたものであるが、家族の形態にかんしては修正し、図式化した。基本的な点は変わらない。

うち水田が大部分を占め2,007ライ、畑地458ライ、菜園68ライの内訳になる。水田は一毛作、畑には換金作物としてケナフが栽培され、ときには西瓜が植えられる。菜園には野菜類と果樹が栽培される。農地経営面積は部落全体で2,486ライであるから、所有面積と大差はない。このことは農地の貸借が少なく、自作農の多いことを物語っている。自小作別農家構成についてみると、自作農がもっとも多く、83軒であるが、これに自作・地主5軒と自小作8軒を加えると、全農家の75%に達する。非耕作地主は元教員1名、精神異常者1名の2世帯である。小作農はわずか1軒、小自作は3軒にすぎない。残る26軒についてみると、そのうち20軒は親族労働者であり、他の6軒は実質的自作農である。この両者を合わせると全農家の20%を占め、自作農について多い。

ここに親族労働者というのは、農地を所有せず、たいていの場合、妻の両親の田畑で働き生計を維持している。そのほとんどは自己の家屋を所有しているが、造りは粗末で、1棟2部屋のものが多く、半数は屋敷地をもたない。そして、ほとんどが穀倉を備えていない。実質的自作農というのは、相続分の一部ないし全部を妻の両親から委任され、その農地で生計を立てている農家である。両者はその性質上一括することができるが、このような世帯の存在が、部落の社会経済構造のもっとも重要な特色である。

親族労働者の世帯は世帯主の年齢も概して若く、すべて夫婦と未婚の子女からなる核家族である。一般に、かれらは結婚直後は妻の両親と同居するが、子供が生まれたのを機会に、あるいは妻の姉妹が結婚したのを機会に、世帯を分けて、妻の生家から分離する。しかし農地を媒介として生産面における共同関係を生家との間に結んでいる。収益にかんしては、水田の場合、収穫米から自己の分け前をもらって、穀倉にもち帰る。穀倉がなければ、その都度、消費分を生家にもらいに行く。不作の年で、保有米がなくなれば、それぞれ自己の消費米を購入する。畑地の場合は、ケナフの売上金を等分する建て前がある。しかし、分配せず、家畜や田畑を共同で購入する場合もみられる。親族労働者の世帯は生家との間に上記のような関係をたもちながら、やがて自己の相続分を任され、実質的自作農へと転化する。妻の両親が老い、あるいは死亡して相続が完了すると、生家から完全に分離して自作農となる。

この過程を家族の周期的発展段階と関連づけてみると図1のごとくである。農家128軒のうち、単独家族は精神異常者の1軒であり、未婚の兄弟2人からなる家族が1軒ある。残る126軒を親族構成の点から分類すると、夫婦と未婚の子女からなる nuclear family が、欠損形態を含めて84例、老夫婦と1組の若夫婦と孫の3世代にわたる stem family が、欠損形態を含めて38例ある。後者にかんしては、ほとんどが娘夫婦であり、その娘の未婚の兄弟姉妹を含む場合と、そうでない場合とがある。残る4例は両親が比較的早く死亡したために、妻の妹が未婚のまま同居している場合である。<sup>5)</sup> したがって、この部落の家族形態の基本的な型は

5) 表2では NF-SF 型となっている。

nuclear family(NF) と stem family(SF) であるが、家族の周期的発展段階と社会経済的意味を考慮すると、それぞれ a, b, c の3種類に分けることができる。その各々の戸数と世帯主の平均年齢は図1に記したごとくである。

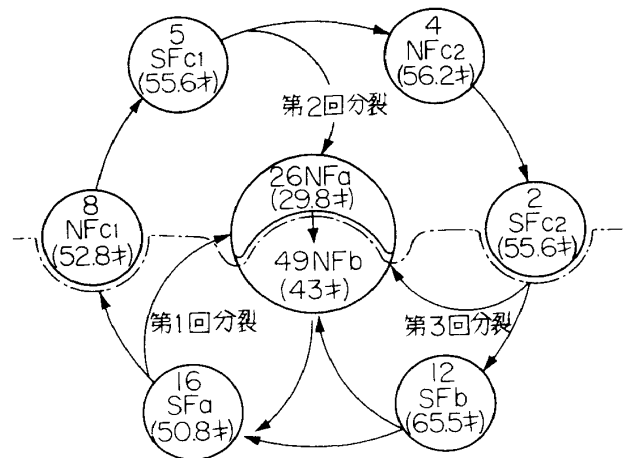


図1 家族の周期

NFa 型はさきに述べた親族労働者ないし実質的自作農の家族であり、世帯主の平均年齢はもっとも低く、30才くらいである。そのほとんどは妻の生家と農地を媒介として結合しているが、その生家の家族形態はNFc1 型、NFc2 型、SFc1 型もしくはSFc2 型のいずれかである。世帯主が40才を越える頃になると、妻の両親も老いたり死亡したりするから、相続を完了し、前者は消費、生産の両面において完全に生家から分離するから、NFa 型はNFb 型に移行する。NFa 型とNFb 型は家族の親族構成の点にかわりはないが、家族の周期と社会経済的意味からして、後者は前者より発展した型である。世帯主が50才くらいになると、うえの子も成長し、娘も結婚する。村では妻方居住制を好み、娘夫婦は親と同居するから、NFb 型はSFa 型に発展する。その親族構成は、一般的にいて、老夫婦、娘夫婦、孫、およびその娘の兄弟姉妹のうち未婚のものを含む。しかし数年すると、第1回目の分離が起こり、娘夫婦は別居して世帯を分けるから、SFa 型は2個の nuclear family に分裂して、NFa とNFc1 に分かれる。ついで2人目の娘が結婚すると、また stem family の形態をとるから、NFc1 型はSFc1 型に移行する。そして、その娘夫婦の別居によって、第2回目の分離が起こり、SFc1 型はNFa 型とNFc2 型に分裂する。3人目の娘が結婚すると、同様な過程が生起するから、NFc2 型はSFc2 型に発展し、後者はまた2個の nuclear family に分裂する。このようにして、最後の娘が結婚するまで、成長分裂の過程を繰り返す。分裂によって生じたNFa 型はかなり長い年月の間、一般に妻の生家と共同関係を維持する。最後の娘が結婚すると、その家族はSFb の形態となる。その親族構成は一般的にいて、老夫婦、娘夫婦、孫であって、娘の兄弟姉妹のうち未婚の子女を含むSFa 型やSFc 型と異なる。この娘夫婦は生涯両親と同居し老後の世話をする。かれらは家屋と屋敷地を相続し、農地にかんしては自己の分け前のほかに、親の取り分を合わせて相続する。その頃には、他の娘夫婦達も自己の分け前をもらうことになるから、その家族形態はNFa 型からNFb 型に移行する。他方、SFb の形態についてみると、両親の死亡によってSFb 型に移り変わる。もし親が長命であれば、孫娘が結婚して4世代の家族が形成されるから、SFa 型やSFc 型に類

似した形態が生じる。このような事例はきわめて少なく、2軒しかない。<sup>6)</sup>

このように自小作別農家形態と農業生産上の共同関係は家族の周期的発展段階上の諸形態と密接な関連をもっている。また農地所有規模も家族の周期的発展と無関係ではないことが予想される。これら社会経済構造上の特質は部落の階層構造を分析する場合、特に留意すべき事柄である。

## II 階 層 構 造

階層分析には相互評価法がしばしば使用される。これは収入、財産、学歴、職業などの特定の諸要素だけでなく、各人のもっている全属性について、相互に評価させ、それによって社会的地位の序列を決定しようとする方法である。相互評価の結果を観察すれば、階層化の対象である社会にはほぼ共通した評価の基準を探ることができるはずである。それは成員自身が日常行なっている常識的なものにすぎないけれども、格づけ作業を通じて、かれらの階層観念を知ることができるという点で階層分析の有効な手段である。

相互評価の対象としては部落の世帯主32名を選び、互いに格づけを行なわせた。被調査者の選出にあたっては、まず、部落の村落開発実行委員が各層を代表しているとおもわれたので、その全員10名を採用した。さらに、重複しないかぎりにおいて、村役、村議、教員、教育委員、寄進総代を加えた。また僧侶と祈禱師も村で尊敬すべき地位にあるので、若干名を選んだ。そして、これら被調査者の農地所有規模、農家形態、年齢を検討し、欠けていると思われる箇所を補った。その他、精米業者や小売店の経営者、村人に金を融通している家、家畜の仲買い、魚捕り、野菜づくり、仕立てなどに優れている家、また農家として成功したとおもわれる家が含まれるように考慮した。

これら32名の相互評価の結果は、すでに本誌第3巻第3号に記したところである。<sup>7)</sup> この表で第1に気づく点は、作業者によって評価順位がかなり違うことである。評価順位の偏差が大きいことは、かならずしもこの部落だけのことではなく、タイ農村一般の特色であろう。<sup>8)</sup> そして、このこと自体、部落を構成する家々の社会的地位が明確に定まっておらず、いわんや身分階層として固定していないことを示している。村人の格づけ作業の過程をみると、部落全体を念頭において位置づけをおこなうというよりも、自己を中心にして身近な範囲から出発しようとする。部落で「えらい人」といえば2～3名にすぎない。あとは自己の親戚、近隣、友人などの範囲のなかから社会的地位の高い人を選び、ついでそれ以外の範囲に向かうという傾向がみいだされる。身近な範囲は、重複することはあっても、人によって異なるから、同一人物

6) 図1では、それぞれ SFa, SFc2 に入れた。

7) 前掲「宗教儀礼の機能的体系」

8) Konrad Kingshill, *Kudaeng*, pp. 270~272.

であっても評価順位に差ができることになる。ことに感情的に対立し合っている場合には順位の差は大きくなる。部落では、僧侶と教員はもっとも尊敬されるべき地位にあるので、これを除外し、農家のみについて、その社会的地位の平均順位を示すと表1のごとくである。<sup>9)</sup>

タイの村落一般について、社会的地位の規定要素としての「農地所有は威光の基本的要因ではなく」その証拠に「村でもっとも貧しい人も、長年僧侶として勤めているならば、その徳のために、得度式の経験のない富農よりも高い社会的地位を占める」といわれている。<sup>10)</sup>事実そうであるけれども、そのために農地所有の階層に対する意味を過小評価すべきではないであろう。

表1 社会的地位の序列

世帯番号	序列	平均順位	順位の 範囲	年齢	家族形態	農地所有 (ライ)	備 考
No. 115	1	4.8	1~16	50	SFa	31	部落長, C. D., 小売店
No. 105	2	6.2	1~15	63	SFa	70	祈禱師, C. D.
No. 94	3	7.2	1~29	82	SFc	76	最年長者
No. 113	4	8.2	2~28	63	SFa	56	祈禱師, C. D., 寄進総代
No. 107	5	10.2	2~19	55	NFc	35	元部落長, 小精米所
No. 114	6	13.0	5~31	59	NFb	25	祈禱師
No. 34	7	13.5	3~28	35	SFb	25	医療役員, C. D.
No. 75	8	14.0	3~31	80	SFb	43	年長者
No. 76	9	14.2	4~26	56	NFc	56	寄進総代
No. 33	10	14.8	5~27	43	NFb	19	村議
No. 74	11	15.2	2~29	38	NFa	0	助役
No. 56	12	15.7	6~29	56	NFb	16	祈禱師
No. 99	13	16.2	8~27	38	NFb	49	教育委員, C. D., 僧歴13年
No. 60	14	17.5	3~31	60	SFb	34	祈禱師
No. 27	15	17.7	3~28	39	SFa	27	C. D.
No. 1	16	18.1	5~30	55	SFc	14	元部落長
No. 101	17	18.2	5~30	53	NFb	57	村議
No. 67	18	18.4	9~28	59	NFc	63	勤勉
No. 23	19	20.0	8~30	47	NFb	40	C. D., 寄進総代
No. 20	20	22.4	8~30	45	SFa	40	C. D., 寄進総代
No. 0	21	22.6	20~31	29	NFa	0	小売店, 金貸し
No. 54	22	23.2	13~30	33	NFb	14	小精米所, 金貸し
No. 15	23	23.4	7~31	42	NFb	16	C. D., モーラム・ダンサー
No. 77	24	23.5	10~31	41	SFb	18	C. D.
No. 95	25	24.7	4~30	32	NFa	0	仕立屋, 金貸し
No. 78	26	24.9	13~31	40	NFb	55	農夫としての成功者
No. 41	27	25.0	19~31	29	NFa	1	野菜作りの普及者

注：C. D. は部落の村落開発実行委員

9) 「宗教儀礼の機能的体系」に示した表1から僧侶と教員を除外し、家族形態の欄を新しく加えた。

10) Wendell Blanchard, *Thailand*, pp. 406~407.



写真1 木蔭で父母を待つ子供

その判定の基準として農地所有規模が考慮されている。表1をみると、一見、農地所有規模は社会的地位の序列と関連がないように見える。しかし、第9位までの農家は、すべて、25ライ以上の農地を持っている。また第21位以下については、26位をのぞくと、部落の平均所有面積20ライを下回る農家ばかりである。この程度において、やはり、農地所有は社会的地位の序列を決定する要素になっている。

つぎに、社会的地位の高低を前に記した家族の諸形態と関連づけて解釈すると以下のごとくである。第9位までは、ほとんどが SFa,b,c 型および NFc 型によって占められている。これらの形態は家族周期の後半に属するものである。唯一の例外は、第6位の NFb 型であるが、世帯主が祈禱師であること、また年齢も比較的高いために、上位に評価されている。第19位以下をみると、ほとんどが NFa 型ないし NFb 型であり、これらの形態は家族周期の前半に属する。例外は第20位と24位である。2例とも、被調査者は年齢的にも比較的若く、妻の母親が存命中であるので、一家の世帯主としてまだ十分な実権をもたない。したがって、家の地位としては、さらに上位に評価されるはずであるが、被調査者自身の要因が考慮されているため、実際よりも下位に順位づけられている。中間にある第10位から第18位までについてみると、第10位、11位、12位、13位は NFa もしくは NFb に属するが、それぞれ村議、助役、祈禱師、僧歴13年という要素のために比較的高く評価されている。第14位、15位、16位、18位は SFa, b, c 型もしくは NFc 型であるけれども、それぞれ祈禱師間の対立、世帯主としての実権の弱さ、経済的地位の低さ、軽い反対感情のために、本来よりも低く評価されている。



写真2 牛車に乗る少年





写真3 ドーン・ハンのカムナンと部落長

根本的基準として存在していることが認められる。

そこで家族形態と農地所有規模を組み合わせ、全農家128軒の分布状況を示すと表2のごとくである。組合わせをおこなった枠内の数字は世帯番号であり、四角でかこったのは世帯主調査を試みた93農家である。世帯番号の右肩の数字は前記の相互評価法にもとづく社会的地位の序列である。この表から階層化をおこなうことができる。

部落の社会階層は、おおよそ家族形態をもとにして、上層、中層、下層の3段階に分けられる。それぞれの社会階層に属する農家の戸数は、上から順に、47戸、41戸、40戸となり、数的分布状況からいうと、ピラミッド型でもなければ、完全な平等型でもなく、全体が3層にほぼ等分されている。上層農家の家族形態は SFa, b, c もしくは NFc であり、家族周期の後半に属する。さらに、平均所有面積の前後が含まれるように、30ライの線で区分すると、上の上に19戸、上の下に28戸の農家が入る。中層、下層の農家は家族周期の前半に現われる形態を示す。中層はほとんどすべてが NFb 型であり、NF-SF 型4戸と未婚の兄弟からなる家族1戸が加わる。同じように、農地所有10ライと30ライの線で区分すると、中の上に11戸、中の下に30戸の農家が該当する。なお、10ライは平年作における自活可能な最低限である。下層農家の多くは NFa 型であり、NFb が若干、他に単独家族が1戸ある。すべて、農地所有は10ライ以下である。便宜上、単独家族および NFb 型に属する農家を下の上とすると、その戸数は14戸である。これに対して、下の下はすべて NFa 型であり、

このように解釈すれば、ごく一般的な傾向として、社会的地位の高い家は家族周期の後半の形態に属し、農地所有規模も概して大きく、反対に、社会的地位の低い家は、だいたいにおいて、家族周期の前半の形態に属し、農地所有規模も小さいといえよう。したがって、村人の格づけ作業の背後には、この二つの要因の複合、すなわち家族生産に対する貢献度が家の社会的地位を決定する



写真4 緑口に米の粉をつく娘

表 2 階 層 区 分

農地所有 (34) 家族形態	0 ~ 2	2 ~ 10	10 ~ 20	20 ~ 30	30 ~ 40	40 ~ 50	50 ~ 60	戸数
SFb 型			<div>13 52 100</div> <div>89 上の下</div>	<div>30 34 81</div> <div>120 77<sup>24</sup></div>	<div>60<sup>14</sup> 75<sup>8</sup></div> <div>82 上の上</div>			12
SFc 型		<div>37</div>	<div>1<sup>16</sup> 10 19</div>	<div>18 48</div> <div>62 85 96</div>	<div>58<sub>a</sub> 107<sup>5</sup></div>	<div>31 47</div> <div>45 93</div>	<div>64 67<sup>18</sup></div> <div>94<sup>3</sup> 76<sup>9</sup></div>	19
NFc 型								
SFa 型		<div>66</div> <div>124</div>	<div>21 43 44</div> <div>122</div>	<div>27<sup>15</sup> 86 111</div> <div>108</div>	<div>115<sup>1</sup> 117</div>	<div>20<sup>20</sup></div>	<div>105<sup>2</sup> 113<sup>4</sup></div> <div>103</div>	16
NF-SF 型			<div>25 130 29</div>	<div>102</div>				4
NFb 型	129	<div>4 5 28</div> <div>36 39 63</div> <div>71 72 17</div> <div>26 87 12</div> <div>下の上</div>	<div>2 15<sup>23</sup> 32</div> <div>33<sup>10</sup> 35 53</div> <div>54<sup>22</sup> 56<sup>12</sup> 69</div> <div>104 109 118</div> <div>119 112 3</div> <div>6 70</div>	<div>57 65</div> <div>84 90 114<sup>6</sup></div> <div>126 97 116</div> <div>中の下</div>	<div>23<sup>19</sup> 83</div> <div>42 51</div> <div>79</div>	<div>88 99<sup>13</sup></div> <div>中の上</div>	<div>46 78<sup>26</sup></div> <div>98 101<sup>17</sup></div>	49
単 独 型		61	12					2
NFa 型	<div>0<sup>21</sup> 7 8 14 16 24</div> <div>41<sup>27</sup> 49 50<sup>7</sup> 9 38 131</div> <div>95<sup>25</sup> 121 123 73 78<sup>7</sup> 80</div> <div>128 58<sub>b</sub> 58<sub>c</sub> 40 下の下</div>	<div>74<sup>11</sup> 74<sup>7</sup></div> <div>110 68</div>						26
戸 数	23	20	32	23	12	7	11	128

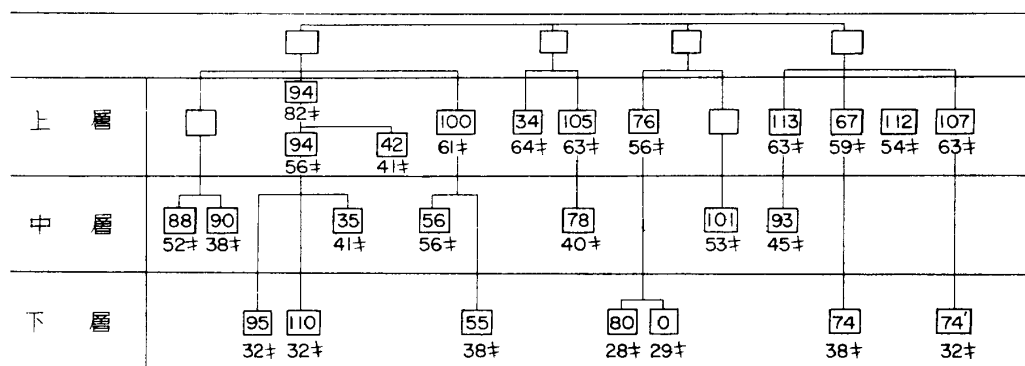
注：□内は世帯調査した農家，右肩の番号は社会的地位の序列

26戸がこの層に属する。この層は、すでに述べた親族労働者、実質的自作農で構成されている。

これらの社会階層を相互評価の順位を参照しながら、検討するとつぎのごとくである。第1位から16位までのほとんどが上層農家群にみいだされ（第1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 14, 15, 16, 18, 24位）、17位以下は中層および下層の農家群にみいだされる。第18位と24位は、すでに述べた理由で、実際の家の地位より低く評価されている。また第6位、10位、11位、12位、13位は中層、下層にみいだされるが、これも先に述べた特殊な地位のために、実際の家の地位よりも高く評価されている。上層農家の上と下についてみると、概して前者の方が後者よりも順位番号が若い。中層農家は上記の特殊な場合をのぞくと、だいたい20位前後である（第17, 19, 20, 22, 23, 26位）。そして上と下を比べると、第26位をのぞいて、前者のほうが後者よりも順位が高い。下層農家群にみいだされる順位（第21, 25, 27位）は中層にみいだされるものよりも一般に低い。中層、下層は上層に比して、サンプル数が少ないけれども、相互評価の対象に選んだ農家は、その層内でも比較的地位の高いものであって、対象としなかった農家は対象とした農家よりも下位にあるものと思われる。

上記のごとく、相互評価の結果を解釈することによって、部落の社会階層を6段階に区分しうる。もっとも、階層区分の標識は村人の考えにもとづいているけれども、区分自体は操作的なものであって、村人達の間には明確な同類意識や共同所属の意識があるわけではない。上層、中層、下層の区別は、村人の目からすると、家族・親族関係や世代間の差異と重なり合って漠然と意識されているにすぎない。その事例を示せば図2のごとくである。かりに自己を下層農家に位置づけると、兄弟姉妹やそれと同じ世代は同じ階層に属するし、親とその兄弟姉妹および同世代の農家は上層に属する。中層農家には自己よりもひとまわり上の兄や姉、あるいはそれと同じ世代の者が入る。その意味で、部落の階層構造は年齢や世代構成と関連している。ただ、この部落では、年長者が年少者よりも高い地位にあり、また尊敬されるけれども、この原理を洗練して部落の組織を積極的に強化することはなく、また年齢集団も存在しない。

図2 階層・世代・親族関係



注：□内は世帯番号，ブランクは死亡

## III 社会階層間の差異

## 1. 家畜・生産用具・日用品

家畜・生産用具の階層別所有状況は表3のごとくである。これらの項目のうち、威光の象徴とみなされているものは牛・馬などの大型動物であって、両者とも上層農家、ことに上の上に多くの飼育者がみられる。水牛・豚・鶏にかんしては上層、中層とも大差はなく、下層では所有農家の割合が少なくなっている。犁、機、ござ編機、簡易噴霧器についても、おなじく、上層と中層の間に差異はなく、下層は少ない。牛車は所有農家が少ないが、上層に多い。

日用品所有状況は表4のごとくである。これらのうち、灯油ランプ、懐中電燈、やかん、靴にかんしては、生産用具や家畜の大部分と同じ傾向を示し、上層と中層の間に差はほとんどなく、これに対して、下層では所有者の割合が少ない。時計、ラジオ、自転車、スプーン、ミシン、石油ランプについてみると、自転車をのぞいて、下層農家に所有者が少ない。<sup>11)</sup> また、これらの品目は上・中・下の階層よりも、そのときどきの経済状態を反映していると考えerのほうが適切であろう。社会階層と現在の経済状態は、つぎに述べるように1対1の対応関係にあるわけではない。

## 2. 所得と余剰

部落の農家経済は、すでに分析したごとく、かろうじて生計を維持できる程度にすぎない。<sup>12)</sup> 表5はこれを階層別にみたものである。6段階の社会階層を所得と余剰の多いものから順にあげると、中の上、上の上、中の下、下の下、下の上、上の下となる。したがって階層と経済状態は一貫した対応関係を示さない。<sup>13)</sup> その理由として、つぎのことが考えられる。第1に、村人の考え方にしたがうと、階層化の根本的基準が家族形態にあり、農地所有規模は第2義的である。したがって、同じ上層といい、中層といっても所有規模の大きいものもあれば、小さい

表3 家畜・生産用具所有農家(93農家) (%)

	水牛	豚	鶏	牛	馬	家鴨	犁	ござ編機	機	簡易噴霧器	牛車
上層	95	27	35	32	19	8	100	73	59	57	22
中層	90	26	26	13	3	13	97	73	63	60	10
下層	65	19	4	4	4	4	73	42	11	19	0
全体	85	25	24	18	10	9	91	63	47	47	12

注：鶏は20羽以上、家鴨は100羽以上

11) 下層に自転車を所持する家があるが、これは長期の賃金労働者である。

12) 前掲「東北タイ農村の経済活動」

13) なお、主観的には93名中75名が中位だと考えている。貧しいと答えたものは、上層に3名、中層に5名、下層に10名ある。

表 4 日用品所有農家(93農家) (%)

	灯 ランプ	油 電灯	懐中 電灯	やかん	靴	時計	ラジオ	自転車	スプ ーン	ミシン	石 ランプ	油
上 層	97	92	59	57	38	43	19	16	19	3		
中 層	100	87	63	50	33	33	27	30	27	17		
下 層	96	65	27	35	19	8	27	12	8	0		
全 体	98	83	52	38	31	30	24	19	18	6		

ものもある。第2に、数年来の不作のため、農地の大部分を占める水田は直接経済状態を反映せず、ケナフ畑、家鴨や豚の飼育、また農外収入が重要な要素となっている。したがって、農地所有規模がほぼ等しくても、同じ経済状態を示すとはかぎらない。第3に、労働力の点からみると、家族形態から推察しうるとく、上層や下層よりも、中層の方が活動力が大きい。<sup>14)</sup>

うえに記した順位のうち、特に注目すべき点を指摘すると、中の上が他の層からかけはなれてよく、最低が上の下であり、下の下が比較的よい状態にあることである。中の上が最上位にある理由としては、第1に過去4年間に購入した米の量が少ないこと<sup>15)</sup>、第2に、ケナフ畑の面積が多く、売上高がよく、また家鴨の飼育活動がきわめて活発であるために、農業所得が一番多いこと、第3に農外所得としては、家畜の仲買い活動が最も激しく、魚捕りからの収入も一番多いことが挙げられる。したがって、農家所得 6,206 パーツ から家計費 3,202 パーツ を差し引いても 3,004 パーツ の余剰がある。この層には、飼料代を前借りする農家もあるが、赤字農家はない。

上の下が非常に悪い理由としては、つぎのことが挙げられる。第1に過去4年間の消費米の購入額が多いこと、第2に、ケナフ畑の面積と収益は中の上を少し下回るにすぎないが、家鴨の飼育がほとんどおこなわれていないために、農業所得は中の上の半分に満たぬこと、第3に、農外収入としてケナフ選別荷造工場で働く娘からの収入があるけれども、男手が少なく家畜の仲買い活動はなく、魚捕りも低調であること、第4に、家族人口は中の上よりもわずかながら多く、家計費を節約しても余剰はほとんど生じないことである。この層の農家所得は 2,307 パーツ、家計費は 2,271 パーツ であるから、余剰はわずか 39 パーツ にすぎない。赤字農家が多いためこの層であって、約60%が水牛を売って調整している。

下の下が比較的よい理由は、第1に、妻の両親からの経済的援助があり、たとえば過去4年間の消費米の購入額が比較的少ないこと、第2に、ケナフ畑の面積も収益も少ないために、農業所得は中の上の半分にも満たないが、賃金労働や家畜の仲買いからの収入がわりにあり、農

14) 生活水準を向上するために、いっそう努力すべきだと考えるものは93名中26名であるが、階層別にみると、上層5名、中層13名、下層8名である。

15) 中の上は4年間に1年半分の消費米を、下の下は1年余りの消費米を他の階層は3年分の消費米を購入している。

表 5 階 層 別 農 家 経 済 (93農家平均)

	上の上	上の下	中の上	中の下	下の上	下の下
農業所得(パーツ)	1,934	1,750	3,675	1,643	858	878
農業収入	2,451	2,646	5,564	2,435	977	1,337
農業支出	517	896	1,889	792	119	459
農外所得	2,436	557	2,531	1,335	422	1,042
農外収入	2,540	610	2,569	1,389	443	1,071
農外支出	104	53	38	54	21	29
農家所得	4,370	2,307	6,206	2,978	1,280	1,920
家計費	3,051	2,271	3,202	2,019	1,189	1,510
差引余剰	1,319	36	3,004	959	91	410
経営面積(ライ)	39.5	19.2	43.5	17.8	8.3	4.7
田	31.3	14.8	33.1	12.9	5.5	2.8
畑	6.8	4.0	9.1	3.7	2.6	1.8
菜園	1.4	0.4	1.7	1.2	0.2	0.1
労働人口(人)	4.2	3.8	3.7	3.3	2.1	2.0
男	2.0	1.6	2.1	1.5	1.0	1.0
女	2.2	2.2	1.6	1.8	1.1	1.0
家族員数	7.6	6.7	6.4	6.2	4.9	4.8

外所得は上の下の下2倍であること、第3に、家族人口は上の下に比してかなり少ないので家計費もそれほどかからないことが挙げられる。農家所得1,920パーツから家計費1,510パーツを差し引くと410パーツの余剰があることになる。もっとも、この層に赤字農家がないわけではなく、26%が水牛を売り払って生計を維持しているが、その割合は上の下よりはるかに少ない。

### 3. 宗 教 観 念

村人はなによりも仏教徒であり、宗教に対する考え方や態度にかんして、階層間に基本的な差異は認められない。もっとも、安居期間中に、寺に参詣して僧侶に食物をささげたり、斎日にお寺でお籠りをしたりするのは若い人よりも、年長者に多くみられる。したがって、年長者のいる家族ではこれらの宗教活動に参加する頻度は多くなる。そして、部落の社会階層が年齢や世代を反映しているかぎり、表6のごとく、上層農家の参加度が多く、中層、下層になるにしたがって少なくなるのはとうぜんである。しかし、寺院に寄進する金額は所得や余剰に関連している。講堂

表 6 宗教慣行参加度 (93農家) (%)

	食事献納		お 籠 り		
	毎日	時々	毎回	時々	不参加
上 層	62	38	62	13	25
中 層	40	60	10	3	87
下 層	19	81	0	0	100
全 体	42	58	27	6	67

の建立に献納された寄進額を階層別にみると、やはり中の上が一番多くて421パーツ、第2位が上の上であって269パーツ、第3位が中の下であって226パーツ、第4位は上の下で165パーツ、第5位は下の上で99パーツ、第6位が下の下で74パーツとなっている。上の下は体面があるので最低にはならないが、中の下よりも額が少ない。下の上も同じ理由で、下の下よりもわずかながら多くなっている。

#### 4. 指 導 者

部落でもっとも権威があり、社会的勢力の大きい人は校長、部落長、助役、村議、村落開発部落実行委員、教育委員、祈禱師、寄進総代である。

部落長は村人によって選出される。任期は一定せず、村人の信頼と尊敬を得ているかぎり、その地位にとどまりうる。不信任の場合、村人は更迭を要求し、新たに選挙をおこなう。部落長は名誉ある地位であるけれども責任が重く、仕事の内容が広範にまたがるので、近年は引退を申し出る者も多い。その理由は老年、健康状態、家庭の事情などである。助役は部落長が任命するが、親族関係を通じて命令しやすい人が選ばれやすい。村落開発部落実行委員は10名あり、開発計画の実施にともなって設けられたものである。開発局から派遣される作業員の助言をえて、部落民が選出する。村議教育委員、寄進総代も選挙によって選ばれる。祈禱師は村で10名ばかりであるが、世襲制ではなく、各人の関心と能力にもとづいて獲得される地位である。

部落の自治は村長とこれらの指導的地位にある人々によって維持・運営されている。そのなかでも、農地所有規模も大きく、年長者であり、祈禱師としてもっとも尊敬されている数名は、村人から「ポー・ヤイ」と呼ばれ、もっとも社会的勢力が大きい。部落長も、これら年長者の意見を無視しては部落の自治をまっとうすることはできない。また上記の指導者達が自己の地位を利用して、その経済的地位を強化したり、より権力のある地位を求める傾向もみいだされない。権力支配は村人の性格に反するものであるし、指導者達はすべてもっとも宗教的であり、道徳的であり、利己的でないことを自ら認めている。

#### 5. 階 層 移 動

部落の階層構造が家族の再生産機構を反映しているかぎり、階層移動は一般的傾向であることが予想される。農地相続のプリファレンスが単独相続ではなく、娘夫婦達の間で平等に分けられることにあるから、世代を超えて富が蓄積されたり、維持されることはなく、世代ごとに蓄積と分散の過程が繰り返される。人生の出発点は親族労働者であり、一生の間に50ライくらいの農地を獲得することを目指して経済活動を展開する。もちろん、出発点が同じであり、また娘均分制だといっても、全くハンディキャップがないわけではない。親の農地が大きければ、子の分割譲渡・相続分も相対的に大きいはずである。表7は分割譲渡・相続分と増加分を階層

別にみたものであって、出発点におけるハンディキャップを示している。親から20ライの農地をもらえれば、それと同じくらいの広さの農地を獲得できるが、10ライくらいの分け前しかないければ、増加分も10ライくらいしかない。

以下、移動の実例を階層別に検討しよう。まず、下の下についてみると、分割譲渡分、増加分ともに少なく、約1ライである。この層は親族労働者もしくは実質的自作農家である。かれらの当面の目標は家屋と屋敷地である。たとえば、No. 41 は夫婦と子供2人の4人暮らしであり、結婚して5年目になるが、その間に野菜作りで金を蓄積し、1964年に0.5ライの宅地を1,200バーツで購入している。しかしそればかりではなく、たとえばNo. 95のごとく農地を購入している者もある。この世帯は夫婦と子供の6人暮らしであり、10年前に結婚して、4年後に世帯を分け、すでに家と屋敷地を購入した。その後、豚を飼い、縫物業をして蓄積した金を村人に貸し付けて増やし、1964年に、17ライの水田と6ライのケナフ畑を13,100バーツで買い求めている。その他No. 0, No. 74, No. 74', No. 110 は少し極端であるけれども、その他も副業にはげみ、着々と準備しつつある。

中の下の層は、平均して12.1ライの農地を相続し、自己の能力で6.3ライの農地を購入している。No. 97 は現在、夫婦と子供3人の5人暮らしであり、22ライの農地を所有している。そのうち相続したのは12ライであり、6ライは妻の姉夫婦がタープラに移動したときに買い上げ、残る4ライは他の人から購入したものである。No. 35 は現在、夫婦と子供の4人暮らしであり、17ライの農地を持っている。ケナフと家畜からの収益で1964年に、1,800バーツ分の水田を購入している。No. 90 は夫婦と子供8人の10人暮らしであり、20ライの農地所有者である。家鴨と豚を飼い、仲買いからの収益を蓄積し、1964年に4ライのケナフ畑を1,900バーツで売り払って、新しく8ライのケナフ畑を5,000バーツで購入している。家屋も1,100バーツで売って、4,500バーツで新しく建てかえた。また、No. 25 は夫婦と子供3人の5人暮らしである。1965年に、水田15ライと畑4ライを9,200バーツで売り払い、グンパーワピイーに水田70ライと畑地

表7 農地相続分と増加分(93農家、階層別平均) (単位:ライ)

	所有規模				相続分				差引増加分			
	田	畑	菜園	計	田	畑	菜園	計	田	畑	菜園	計
上の上	30.7	7.9	1.4	40.0	18.3	0.1	0.1	18.5	12.4	7.8	1.3	21.5
上の下	15.0	3.1	0.4	18.5	9.6	0.6	0.1	10.3	5.4	2.5	0.3	8.2
中の上	37.4	9.1	1.7	48.2	21.9	2.1	0.3	24.3	15.5	7.0	1.4	24.9
中の下	13.9	4.1	0.4	18.4	9.9	2.1	0.1	12.1	4.0	2.0	0.3	6.3
下の上	5.6	0.9	0.1	6.6	5.1	0.8	0.0	5.9	0.5	0.1	0.1	0.7
下の下	0.4	0.9	0.1	1.4	0.0	0.0	0.1	0.1	0.4	0.9	0.0	1.3
全体	16.5	3.9	0.5	20.9	9.9	0.9	0.1	10.9	6.6	3.0	0.4	10.0



50ライ分を14,750バーツで買い求めて移動した。この世帯は家畜やござの仲買いをして蓄積したという。No. 56 も同じである。夫婦と子供 8 人の10人暮らしで、16ライの農地所有者であったが、1966年にそれを 19,000バーツで売り、ノーンゲブアランプーに 100ライ余りの土地を購入して移住していった。

中の上は相続分 24.3ライ、増加分 24.9ライである。No. 78 は現在、夫婦と子供 7 人の 9 人暮らしであり、54ライの農地をもっている。そのうち27ライは分割分であり、他の27ライは妻の姉夫婦がタープラに移住したときに買い求めた。1966年には 畑 2 ライを 1,000バーツで購入している。この家族は家鴨と卵からの収入が非常に多い。No. 101 は現在夫婦と子供 6 人の 8 人暮らしである。自己の分け前と親の取り分を合わせて35ライを相続したが、妻の母の兄夫婦がガーラシンに出たときに、その農地 3 ライを買い、その他に19ライを買い求めたので、現在57ライの農地を所有している。この家族は、家鴨と 鶏の飼育、家畜の仲買い活動が盛んである。No. 83 は夫婦と子供 3 人の 5 人暮らしである。1964年に 35ライの農地を所有していたが、豚の飼育と家畜商からの収益で、1965年には畑地 3 ライを 600バーツで買い、1966年には 10ライのケナフ畑を購入している。

上の下は平均して10.3ライの農地を相続し、8.2ライを買いたしている。No. 111 は現在、母と未婚の子女 5 人、娘夫婦と孫 3 人の11人暮らしである。現在所持している農地26ライのうち、12ライは妻の兄夫婦が ウドーンに移動したときに購入した。No. 18 は現在夫婦と子供 3 人の 5 人暮らしであり、娘 1 人は結婚して別居している。27ライの農地を持っているが、そのうち 5 ライは、1964年に妻の姉の息子夫婦が他村に移動したときに 4,000バーツで買い求めた。No. 85 は夫婦と子供 6 人の 8 人暮らしであり、娘夫婦が別居している。農地25ライを所有していたが、1965年に畑 4 ライを 2,300バーツで買った。

上の上についてみると相続分 18.5ライ、増加分 21.5ライである。No. 75 は現在43ライの農地所有者であるが、自己の分け前と親の取り分を合わせて23ライの農地を相続し、妻の姉夫婦 2 組がウドーンとグンパーワピーーに移動したので、その農地 20ライを買い取った。No. 105 は娘夫婦と孫の 9 人暮らしであり、70ライの農地をもつ。そのうち相続分は25ライで20ライは妻の姉夫婦がチュンパーに出たときに買い取り、残りの25ライは他の人から購入した。No. 67 は夫婦と子供 4 人の 6 人暮らしで、娘夫婦が別居している。現在74ライの農地を所有するが、そのうち13ライは妻の親から、7ライは夫の親から、3ライは夫の弟から相続し、他は自己の力で獲得したものである。1964年には水田11ライを5,000バーツで買い、さらに畑 5 ライを2,000バーツで購入した。No. 677 は夫婦と未婚の子女 7 人、娘夫婦と孫の12人暮らしである。農地30ライを所有していたが、1965年に畑地 8 ライを 3,500バーツで購入した。

このように、どの階層をとってみても農地購入の事例は多い。下の下に属する親族労働者も、家族の周期的発展段階を通過しながら農地を次第に蓄積し、より高い階層に移動していく。も

ちろん最終段階において、すべての人が上の上に到達するわけではない。同じ上層に到達するとしても、親の地位と自己の能力にもとづいて農地所有規模に差が生まれる。しかし、たとえば50ライの農地を所有していたとしても、娘が結婚するほどの年齢にならないかぎり上層とはみなされず、中層にとどまる。下層から上層への移動は農地所有と家族の周期という2重の要素をもった階梯を上昇することによってなし遂げられる。このようにして、村人が一生涯かかって築きあげた地位は一代かぎりであって、世代が変われば、財は分散し、周期の出発点に戻る。下降運動は世代の交替にともなっておこる。なお農地売却にかんしては、他村への移住によるものが一般的であり、貧困のために農地を失う例はごくまれである。

### お わ り に

以上、分析した点を要約して結びとしよう。

部落は無家格型の社会であって、身分階層制は認められない。家の地位は代々定まっておらず、個人の業績にもとづくところが大きい。村人の考え方にしただと、家の社会的地位の高低の基礎は個人がなし遂げた家族再生産に対する貢献度にある。そして、それは家族の周期的段階上の形態と農地所有規模によって測定できる。これを基準にして部落の社会階層を操作的に上・中・下の三つの層に区分しうる。さらに各層は上下に細分することができる。生活様式の点からいって、これら社会階層の間に特につけはなれた差異はみられない。家畜、生産用具、日用品の大部分については、下層に所有者が少なく、上層と下層ではそれほどの違いはない。時計、ラジオ、自転車、スプーン、ミシンなどは所得と余剰に関連しているように思われる。寺院の寄進額もまた同様な傾向を示している。所得と余剰は社会階層と1対1の対応関係を示さない。中の上がもっともよく、上の下がもっともわるく、下の下は比較的よい。その理由はすでに述べたごとくである。指導者のうち、もっとも社会的勢力の大きいものは上の上に属するが、他の多くの者は下層をのぞく各層から選出されている。また権力を手段として利用したり、権力のために権力を求めることは村人の性格に反するところであって、部落には権力支配のパターンは認められない。上のような社会階層間の差異の実態が示すように、部落の階層は構造化の度合がきわめて弱い。部落には家族の周期的段階上の形態と農地所有規模にもとづいて、連続的な多くの社会階梯があり、個人と家族はその階梯を上下する。この階梯は、村人の目からすれば、世代や親族関係と重なり合って漠然と意識されているにすぎない。ただし、年齢や世代の原理をよりいっそう洗練して部落を構造化する傾向はみいだされない。